

統合失調症

両親に発症歴ない患者
遺伝子突然変異 関与か

徳大院グループ発表



沼田准教授



大森教授

統合失調症は、妄想や幻聴といった症状が特徴的な精神疾患

統合失調症の発症に、両親から受け継いだものではなく、子どもの遺伝情報に新たに起こった突然変異「デノボ点変異」が関与している可能性があることを、徳島大大学院医歯薬学研究部の大森哲郎教授（精神医学）らの研究グループが明らかにした。原因が不明な統合失調症の病態解明に役立つと期待される。研究成果は6日付の英科学誌サイエンティフィック・リポーツに掲載された。

発症には遺伝的要因が関わっていると考えられているが、家族に発症歴がない患者も多くなる。研究グループは、こうした患者の発

症には、主に10〜30代が発症する。国内の患者数は厚生労働省の推計で70万人以上とされ、およそ100人に1人がかかるといわれている。

症メカニズムを明らかにするため、患者本人と精神疾患にかかっていない両親の遺伝子の塩基配列を解読し、解析。協力を得られた18組のうち、患者8人から計9個のデノボ点変異を発見した。このうち、精神疾患の自閉症の患者で同様の点変異が報告されている「TBL1XR1遺伝子」に着目。デノボ点変異が生じると、遺伝子のタンパク質構造が不安定となり、細胞の増殖や分化を調整する細胞内シグナル伝達経路「ウイントシグナル経路」に影響があることが分かった。研究を主導した医歯薬学研究部の沼田周助准教授（精神医学）は「家族に発症歴がない統合失調症の病態解明につながる知見を得た。発見した変異が、多数の患者に認められるかどうか検証したい」と話している。（笠井理）